

平成15年版 科学技術白書
これからの日本に求められる
科学技術人材

文部科学省 編

毎年発行される「教育白書」は、教師にとって座右の書でなければならないが、工業教育に携わる教師にとっては、科学技術要覧とともに「科学技術白書」は必携の書といつてよい。自分の教育観と国の工業教育政策のすり合わせは、大切なことであるからである。

特に、平成15年度の「科学技術白書」は、副題として「科学技術人材」とあるので、発刊とともに早速一読した。本書は3部構成から成り、1部 求められる科学技術人材、2部 科学技術活動の状況、3部 科学技術振興施策としてまとめられている。1部では、第1-1-13図の研究者から見たさまざまな科学技術人材への不足感(p.14)、2部では、第2-2-1表研究者の定義についての日米比較(p.133)、3部では、(1)「ものづくり」にかかわる人材の養成・確保(p.320)、(2)情報通信技術(IT)と製造技術(MT)の融合による生産システムの革新(p.321)に注目した。どの白書も網羅的・断片的にまとめられるという通弊に落ち入りやすいが、本書もまた、その傾向にはまった感がある。p.14の科学技術人材の不足感の図で、①研究者(研究事務担当者、エンジニア)は「質量ともに比較的充足」としているのに対し、②研究支援人材(技能者、研究補助者)の量的な不十分さ、③マネジメント人材の質の不十分さ、④科学技術と社会を媒介する人材(含起業支援)の質量の不十分さ、に分け、日本の科学技術の課題を明確に示しているのであるが、この1部の課題に対し、2部・3部でこれに答える施策内容が極めて弱く、日本の科学

技術政策の貧困さを露呈してしまっている。

また、p.85第1-3-82表算数・数学、理科が好きな生徒の割合(国際比較)に代表されるような表が随所に用いられているが、科学技術と理数教科のみを結びつけることには、いつも無力感を感じてしまうのである。

さらには、p.321のITとMTの融合による生産システムの革新については、このような数行の表現では現わせないほど進歩が速いことを銘記すべきではないか。新製造技術者(テクノロジスト・エンジニアとテクニシャンの両者の資質を持つ実践的技術者)の大量養成の必要性を、研究支援人材の不足への対応としてもっと示してほしかった。

科学と技術との境界が無くなるような時代になっていること、技術政策については経産省や厚労省など他省庁の政策に待つという面もあろうが、本書は科学技術白書ではなく、科学白書ではないかと思った次第である。高い頂点には、広く強い裾野が必要である。一国の技術力は、広い強い労働力に支配される。そう思って、日本の科学技術の基盤をゆるぎないものにするためにがんばっている工業教育関係者にも、元気のでる白書の内容にしてほしい。文部省と科学技術庁がいっしょになったのは、そのためではないか。

本書を読んで痛切に感ずることは、日本の学校はWhyの優劣のみを競う場となり、Howを教えたり、体験させたりすることが極めて劣悪であるということである。WhyとHowとが等価に認知された時、科学技術創造立国、子供たちの幸せは実現することであろう。

Howを中核に教育を進めている工業教育関係者が、自分の立場の薄さを感じとり、劣等感の克服に向うため、是非とも一読をおすすめしたい。

(国立印刷局 平成15年6月、398頁、2600円、小林一也)